

# JOHA ニュースレター

第38号

## 日本オーラル・ヒストリー学会第18回大会 (JOHA18) のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第18回大会 (JOHA18) が 2020年9月13日 (日) に立命館大学を開催校としてオンライン開催されます。また、9月5日 (土) にはプレ企画として研究実践交流会がオンライン開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

### 【目次】

I. 学会大会	II. 理事会報告 . . . . . 7
1. プレ企画 : 研究実践交流会	1. 第九期第3回理事会 (2020年6月14日)
「コロナ禍の「声」を記録する」 . . . 2	2. 第九期臨時理事会 (2020年7月26日)
2. 日本オーラル・ヒストリー学会 第18回大会	III. お知らせ . . . . . 10
大会開催校より . . . 3	1. 会員異動
1. 大会プログラム . . . 4	2. 2020年度会費納入のお願い
第1分科会 (環境・文化)	
第2分科会 (戦争・歴史)	
2. 自由報告要旨 . . . 5	

.....  
\*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

# I. 学会大会

## 1. プレ企画 研究実践交流会「コロナ禍の「声」を記録する

### ーオーラル・ヒストリーに何ができるか」

日時：2020年9月5日（土） 13：00～16：30（開場 12：30）

場所：オンライン開催（Zoom利用）

#### 要事前申し込み

下記ミーティングアドレスから事前登録をお願いします。

<https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZYod-2vqT0rGtLF7XoMrHqoFEu.jqkBCY7HG>

参加費：無料

プログラム

趣旨説明

発表（各20分）

1. 小林多寿子・庄子諒 「コロナ禍のフィールドワークー福島県南相馬市における相馬野馬追調査に取り組む一橋大学社会学部小林ゼミナールの場合ー」

2. 安岡健一・松永健聖 「「緊急事態」の声を聞くー大阪大学文学部文化交流史演習の取り組みー」

3. 野入直美 「アフターコロナに残したいことー琉球大学学生プロジェクトチームによるweb公開の試み」

コメント 菊池信彦

質疑応答・事例紹介

グループ・ディスカッション（グループは主催者が割り振ります）

まとめの討論

#### 趣旨

2020年、新型コロナウイルス感染症が世界を覆っている。犠牲者は50万人を超えてなお感染は拡大しており、危機の収束は見通せていない。日本社会もまた2月末の一斉休校措置にはじまり、4月初頭から5月末に至る全国的な緊急事態宣言という未曾有の経験を経て、いまま歴史的変動のただなかにある。予断を許さない現状は、対話や集会という営みを、恐れを伴うものに変えてしまった。

こうした状況において、オーラル・ヒストリーに何ができるだろうか。一つの応答として、この非日常的な日常を生きる人びとの声を少しでも集め記録することがある。すでに感染の爆発的拡大の直後から、応急的な反応の記録（Rapid Response Collecting）として、オーラル・ヒストリーを含む資料収集が呼びかけられ、世界各地の大学・公共図書館・博物館など多様な機関が聞き取りに取り組みはじめている。日本国内でもいくつかの博物館やデジタルアーカイブ関係者が資料収集を呼びかけている。

ただちに症状がでない感染症の流行は、教育・研究の場からフィールドワークの機会を奪っている。しかし、こうした状況であっても、可能な聞き取りもあるだろうし、この間に普及した遠隔コミュニケーションのツールを活用する方法などもあるのではないだろうか。

今回の研究実践交流会では、大学の授業として取り組んだ、コロナ禍の「声」を記録する実践を報告する。まず小林・庄子両氏には、現在困難を極める実地フィールドワークの現在について福島県南相馬市を事例に報告をいただく。次に、安岡・松永両氏が4月から取り組んだオーラル・ヒストリーの実習授業を素材に、目的・アウトライン・結果について報告する。最後に、野入氏に受講生たちが自主的に取り組んだコロナ禍の生活記録公開プロジェクトについて報告していただく。これらの報告に対して関西大学でコロナアーカイブに取りくむ菊池氏よりアーキビストの立場からコメントをいただく。この3つの報告およびコメントを通じ、このような状況でも／だからこそできることがあることを共有したい。

さらに、今後私たちが連携することをつうじて、各地の声を収集し紐づけることが出来れば、まとまった量の声を後世に残すこともできるはずである。1910年代のインフルエンザの流行をはじめ感染爆発の歴史が真剣に参照されている現状を見ても、いまを生きる自分たちが現代と後世のために果たしうる役割は小さくない。

当日は、質疑とグループ・ディスカッション、各地における実践例の交換などをつうじて今後の連携につなげて、学問の社会的意義を展望することを目指したい。

主催：日本オーラル・ヒストリー学会

問合せ先：[joha18\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha18(at)ml.rikkyo.ac.jp)

## 2. 日本オーラル・ヒストリー学会 第18回大会

### Japan Oral History Association 18th Annual Conference

#### 《大会開催校より》

JOHA 第18回大会は、立命館大学衣笠キャンパスにて開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けてオンラインでの開催となりました。移動の自粛が求められ対面での集会在困難にある現在、新たな可能性を探る取り組みの一環として実施いたします。

本大会では、魅力的な自由報告2部会と総会を企画しております。例年の大会では、これらに加えて開催校企画のシンポジウムと研究実践交流会を催していますが、それぞれ別途開催することになりました。開催校企画シンポジウムは2020年度末頃を予定に、共催の立命館大学生存学研究所とともに、「ハンセン病とオーラル・ヒストリー」を企画しております。情報が確定しましたら、あらためてメーリングリストや学会ホームページでご案内いたします。同じく9月5日に別途開催される研究実践交流会「コロナ禍の「声」を記録する—オーラル・ヒストリーになにができるか—」にも、振るってご参加ください。

当学会として初めてのオンライン大会の試みであり、至らない点多々あるかと思いますが、ご理解を

いただければまことに幸いです。

JOHA 第 18 回大会開催校理事 佐藤 量(立命館大学)

開催日：2020年9月13日(日)

開催方法：Zoom ミーティング

別途、会員宛に Zoom ミーティングアドレスをお伝えします。また、総会などの確定情報についても、随時、会員メーリングリストならびに JOHA ホームページで更新していきます。

参加費：無料

JOHA18 実行委員会：佐藤 量\*開催校理事、立命館大学大学院生、学部生

学会事務局：矢吹康夫、研究活動委員会委員長：橋本みゆき、会計：上田貴子

・大会に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

問合せ先：[joha18\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha18(at)ml.rikkyo.ac.jp)

### ◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分(合計 30 分)で構成されています。
- 2) 配布資料は、事前に提出していただく PDF ファイル等を発表時に参加者へチャット配信する予定です。

そのほか詳細は、オンライン開催に伴う確認事項がありますので別途連絡いたします。

JOHA 第 18 回大会開催校理事 佐藤 量(立命館大学)

## 1. 大会プログラム

9月13日(日)

10:20 開会

10:25~12:00 自由報告部会 1

第 1 分科会 (環境・文化) 司会：李 洪章 (神戸学院大学)

- ・有馬絵美子 「多雪環境に生きた一住民の記憶 -民俗学の視点から-
- ・中澤英利子 「継承語とともに生きる—ブラジル日系コミュニティの日本語教師の語りから」
- ・Jay Alabaster 「『ザ・コーヴ』が与えた副次的な影響の語り」

12:00~12:55 休憩

12:55~14:30 自由報告部会 2

第 2 分科会 (戦争・歴史) 司会：酒井朋子 (神戸大学)

- ・山本真知子 「弔いの場からはじめる——死者から託されたことばを契機とした記憶行為の試み——」

- ・江口千代、橋本清勇、大庭悠希、桜井厚 「「軍港都市」がもたらした子どもの生活への影響～戦中・戦後を生き抜いた人々の語りから」
- ・吉本裕子 「アイヌ古老のライフストーリー展示から「歴史化」へ」

14：30～15：00 連絡コーナー（仮称）

- ・研究活動委員会
- ・編集委員会

15：00～15：10 休憩

15：10～15：50 総会

## 2. 自由報告要旨

### 第1分科会（環境・文化）

司会：李 洪章

- ・多雪環境に生きた一住民の記憶 –民俗学の視点から–

有馬絵美子（神奈川大学 歴史民俗資料学研究科博士前期課程）

長野県飯山市において、昭和元年生まれの女性より2008年～2009年に行った聞き書きをもとに、多雪環境下での人生をオーラルヒストリーを用いて検証する。

女性への聞き取りでは、雪の種類に応じて積雪を認識及び命名して生業に役立てていること、ライフステージの変化とともに雪への印象が変わっていったことが、回想と語りから伺えた。

「多雪環境」に生きた一住民の「雪」への認識とその変化や生き様を、オーラルヒストリーを用いて記録することで、人と自然との関係について記録を残す足がかりとしたい。

- ・継承語とともに生きる—ブラジル日系コミュニティの日本語教師の語りから

中澤英利子（横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科博士後期課程）

ブラジル日系社会の日本語教育は、日本語を母語とする移民一世代の教師により長く教育環境が保たれてきた。しかし、世代交代が進んだことでバイリンガルの教師が多く現れており、その生活経験やライフコースも多様になっている。本報告は、日系コミュニティの日本語学校の教師である日系三世の女性Lの語りから、日本語という継承語とともに生きる「日本語人生」を考察するものである。日本での就労経験を持つLは、ブラジルでも日本でも日本語を活用することで選択的に社会関係の移動を行ってきた。現在、多くの日系コミュニティでは日本語が生活言語として機能しなくなっているが、そのような状況のなかでコミュニティの日本語学校の日本語教師として生きる現実を考察する。また、ブラジルの日系人の日本語継承と日系コミュニティの維持という問題もあわせて検討する。

・『ザ・コーヴ』が与えた副次的な影響の語り

Jay Alabaster (アリゾナ州立大学博士課程)

2010年、ルイ・シホヨス氏が監督を務めた『ザ・コーヴ』(The Cove)が、第82回アカデミー賞を受賞すると、和歌山県にある人口約3千人の小さな漁師町の太地町は、捕鯨・反捕鯨という世界的論争に巻き込まれ、国内外のメディアで特集記事が組まれることとなった。

その記事の多くは、「イルカの追い込み漁は残酷である」といった環境保護および動物愛護の観点を主張する外国人活動家と、「イルカの追い込み漁は日本古来の伝統である」とする伝統・歴史的な観点を主張する漁師との論争を紹介するものである。

しかし、『ザ・コーヴ』の公開は、論争に直接的な関与をしていない人々の生活や信念までも変化させているが、今まで焦点が当てられることはなかった。そこで、今まで取り上げられることがなかった人々への影響を、彼らの経験の語りから紹介し、考察を行う。

## 第2分科会 (戦争・歴史)

司会： 酒井朋子

・弔いの場からはじめる——死者から託されたことばを契機とした記憶行為の試み——

山本真知子 (同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期)

戦争体験者がいなくなった後の記憶の継承は、どのようになされうのか。残された者たちは、何をどう記憶していくことが求められているのか。本報告は、体験者不在のなかでの記憶の継承という問題を考える一歩手前において、死者を弔うための場をつくろうと試みるものである。その方法として、沖縄県東村高江を取り囲むように計画された米軍ヘリパッドの新設・運用に対して座り込み抗議してきた、沖縄戦体験者の故・伊佐眞三郎さんから託された言葉を出発点に、彼の家族へのインタビューを重ねた。その過程を通して、彼の生の痕跡が浮かび上がってくるだけでなく、死者を弔う場が生み出されていくということに注目し、そこに内包された記憶行為の可能性を探る。

・「軍港都市」がもたらした子どもの生活への影響～戦中・戦後を生き抜いた人々の語りから (共同報告)

江口千代 (広島国際大学)

橋本清勇 (広島国際大学)

大庭悠希 (西九州大学)

桜井厚 (日本ライフストーリー研究所)

世界各国で原爆投下の街として知られる「Hiroshima」から20kmほど離れた「呉」は、その恵まれた地形により東洋一の「軍港都市」として発展し、戦艦大和を創出したことで知られている。当時は最大40万人もの人々が生活し、様々に恵まれていたと言い伝えられ、豊かな都市だったという伝承が残っている。しかし、その豊かさは何だったのか、言い伝えられている豊かさは子どもたちに何をもたらしていたのか、それらはまだ明確になっていない。そこで本研究は、「軍港都市」と呼ばれた「呉」を研究対象とし、戦中・戦後を通して今も居住し続ける人々の子ども時代の語りを紐解き、軍港都市がもたらした子どもの生活への影響を明らかにする。

・アイヌ古老のライフストーリー展示から「歴史化」へ

吉本裕子（横浜市立大学 客員研究員）

本報告では、今を生きるアイヌ古老のライフストーリーが地域博物館で展示されたことにより、古老の記憶が何度も語りなおされ「歴史化」してゆくプロセスを考察する。展示の題材になったライフストーリーは、聞き手（私＝報告者）と語り手（古老）の双方向的な関係性の中から共同製作的に生み出されたものである。しかし、この展示実践では、古老が会期中、会場に常駐したことにより、多くの観覧者（複数の聞き手）との対話が実現し、「いま・ここ」での語りやコミュニケーションが繰り返された。これは企画想定外のことであり、古老の主體的な展示参加によるものである。本報告では、このような偶発的な対話から何が生成され、一個人のライフストーリーが民族の「近い過去の歴史」へと、いかに接続されたのかを検証する。

## Ⅱ．理事会報告

### 1. 第9期 第3回 JOHA 理事会 議事録

日時：2020年6月14日（日）13：00～18：00

場所：Zoomによるオンラインミーティング

出席：赤嶺淳、矢吹康夫、上田貴子、石川良子、今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也、橋本みゆき、小林多寿子、能川泰治、安岡健一、山本恵里子、佐藤量、野入直美（議事録作成）

#### 1. 前回議事録・議事録記載者確認

出席理事により前回議事録を確認、承認された。

#### 2. 会長から

赤嶺会長より挨拶。オンライン学会開催について環境社会学会の情報提供がなされた。

#### 3. 編集委員会報告

石川委員より、最新号の進捗状況の報告があった。16本が投稿され、掲載可が3本、今後いくつか増え、例年通り4、5本になる見込みである。

投稿規定の改定について、執筆要領の順守、投稿前入会ルール of 明確化、字数の明示、J-Stage 公開の明示、匿名の徹底などについて提案がなされ、今後、メールでの継続審議を行うことが諒承された。著作権と電子公開、再利用は併せて審議することとなった。

査読方法の見直しが議論され、回数は上限3回となった。論文の文字数は16000字以上となった。研究ノートは、文字数で論文との違いを設けるよりも、萌芽性などで積極的に位置づける検討をすすめる。

論文の質向上に向けてのワークショップを行うことが提案された。年次大会には組み込まないが、趣旨説明を行うことは検討されることになった。公開査読にし、継続的なものにする、編集委員以外の理事も参加することが議論された。

#### 4. 研究活動委員会・大会開催校報告

2020年度大会の開催について、開催校の佐藤委員から、朱雀校でなく衣笠校での現地開催とオンライン開催の両方の可能性があることが報告され、現地開催・オンライン開催のメリットとデメリットが議論された。オンライン開催のやり方として、資料公開、ライブ配信、録画公開があることと、オンライン開催を業者委託する場合の予算が提示された。

開催校としてはできれば対面でやりたい意向であること、オンライン開催ならシンポジウムだけ延期し、3月の研活シンポジウムとしての開催または立命館大学による独自開催も検討したいとの報告があった。オンラインの場合、人数の上限を決め、事前登録をすること、初めての人は事前にテストしておくこと、ITリテラシーのある司会を選ぶこと、技術力のあるアルバイトを登用すること、事前リハーサルを行うこと、質疑応答のやり方を考えること、録画・録音を禁止することなどが提案された。

研究活動委員会：橋本委員から、現地開催でもオンラインでも9月13日一日開催とすることが提案された。予定されている内容は、自由報告部会「環境・文化」・「歴史・戦争」（エントリー計7人）、研究実践交流会、シンポジウムであることが報告された。

研究実践交流会：安岡委員から「緊急事態を記録する」という企画が提案され、JOHAとしてコロナに関わる〈声〉を集めることで、個別に取り組むよりも資料的価値が高まるとの説明がなされた。すでに安岡委員が担当する授業において着手がなされている。審議の結果、安岡委員による授業実践を題材として呼びかけをし、共同の取り組みへと広げていくこととなった。

審議の結果、立命館大学による主催で、オンライン1日開催（9月13日）が決定された。シンポジウムは別途、実施されることとなった。学会としてのzoom契約をせず、セキュリティ対策などについてはこれから情報を収集していく。事前登録制で無料開催し、ライブ配信をするか事前録画をアップする。オンライン開催への切り替えに伴い、自由報告者で辞退者が出ないかどうかを確認することが決まった。また、年次大会では自由報告部会と総会だけを実施し、研究実践交流会はプレ企画として別途、開催することとなった。

#### 5. 会計報告

上田委員から、年次大会のオンライン開催により予算が変更されることと、J-stageへのオンライン掲載に経費がかかることが説明された。

#### 6. 事務局報告

矢吹事務局長から、名誉会員についての取り決めに次回総会の審議事項とすることが提案された。次回臨時理事会で審議することとなった。

## 2. 第9期 臨時JOHA理事会 議事録

日時：2020年7月26日（日）13：00～18：00

場所：Zoomによるオンラインミーティング

出席：赤嶺淳、矢吹康夫、上田貴子、石川良子、今野日出晴、佐野直子(議事録作成)、塚田守、根本雅也、橋本みゆき、小林多寿子、能川泰治、安岡健一、山本恵里子、佐藤量、野入直美



## 1. 編集委員会報告

石川委員より、最新号の進捗状況の報告があった。査読は終了し、16本投稿中5本掲載可となった。今後「実践報告」原稿（赤嶺・佐野）が提出され、書評原稿はなし。最新号の刊行は10月初めの予定。

根本委員より特集進捗状況の報告があった。まだ1本原稿が届いていないが、月内にめどがつけられる予定である。

石川委員より投稿規定・執筆要領の改定案について報告があった。字数、研究ノートの意味、「研究ノート」の名称、電子公開の方法について議論し、文面を決定した。執筆要領は毎年投稿募集の時にHP上で公開し、学会誌上にも改訂版を掲載することとした。

「実践ワークショップ」については、今後編集委員会で議論し、査読の進め方については大会後に議論することとなった。

## 2. 研究活動委員会・大会開催校報告

開催校の佐藤委員より、2020年度大会の開催（オンライン）について報告があった。大会費用（20万円内）で、準備段階からのアルバイト代、前週の研究実践報告会はカバーすることとし、年度末のシンポジウムは研究活動費から捻出することとした。

学会はZoomで行い、学会名義でZoomビジネスプランに入会（ひと月27000円、8月3日から赤嶺会長名義で申し込み）して、担当理事やアルバイトなどにホストアカウントを与えたとした。

大会参加費は無料とし、非学会員にも公開、学会員にはあらかじめMLで告知し、非学会員にはHPで告知して、Zoomにあらかじめ登録する（定員300名）。ただし、大会報告と総会のミーティングIDを変えて、総会のIDは非学会員には通知しないこととした。Zoomアカウントがとれたらすぐに広報を行うこととした。

大会問い合わせのためのメールアドレスを矢吹委員に作っていただき、そこに担当者が登録し、質問や当日に対応できるようにすることとした。当日の研究実践交流会の対応者は橋本委員（仮）となった（大会についての当日担当者は未定）。

今後の進捗については、MLで報告・議論することとした。

橋本委員より、大会スケジュールについて報告があった。発表資料はチャットで配信し、質疑応答はチャットで質問受付、タイムキープは声で直接行い、セキュリティについては本部で管轄することとした。また、理事会は研究実践交流会（9/5）前の午前10:30より開催することとした。

安岡委員から研究実践交流会について報告があった。開催日時は9月5日13:00-16:30 Zoomで開催し、司会は安岡委員、質問整理は研活担当理事、他にアルバイトを依頼することとした。

## 3. 広報

野入委員から、ニューズレターのための原稿を提出するようお願いがあった。

## 4. 会計

上田委員から、10月にJ-stageに15号を公開依頼する（1件1500円）との報告があり、今後大会などの費用などについては理事会MLで議論し、大会前の理事会で確認することとした。

## 5. その他

赤嶺会長より、JOHA20周年に向けて若手研究者への奨励賞創設について提案があった。詳細は次回理事会で議論し、来年の総会には決議したいとの意見が出された。

賛助会員については次回理事会にて議論することとなった。

## Ⅲ. お知らせ

### 1. 会員異動（2019年12月16日～2020年7月26日）

#### (1)新入会員（入会順）

市川 由希子	大手前大学国際看護学部
佐和田 成美	東京外国語大学
Jay Alabaster	アリゾナ州立大学ジャーナリズム・マスコミュニケーション学部博士課程
佐藤 正則	山野美容芸術短期大学
藤谷 悠	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 後期博士課程
佐川 宏迪	京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程
橋本 清勇	広島国際大学看護学部看護学科・准教授
西 成彦	立命館大学名誉教授
吉本 裕子	横浜市立大学客員研究員 慶應義塾大学非常勤講師
江口 千代	広島国際大学看護学部
大庭 悠希	西九州大学看護学部
坂本 唯	立命館大学大学院 先端総合学術研究科
神辺 知加	東京国立博物館 展示デザイナー
有馬 絵美子	神奈川大学 歴史民俗資料学研究科 博士前期課程
青木 研輔	東大手の会・代表世話人

#### (2)退会

栗木千恵子、中村英代、亀山恵理子、田中美延里、武井順介、工藤由美、田中雅一、水本浩典、門池啓史、石川照子、中山雅雄、山本須美子、伊藤友江、本間千尋、広谷鏡子、山田幸雄、安倍尚紀、荒牧真由子、安藤真太郎、斎藤雅哉、斎藤紀江、佐々木加奈子、中平遥香、仁井テリー、深谷直弘、松永伸太朗、弓削康史、横塚紀子、吉田真理子、松岡瑛理

\*連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 矢吹康夫）

## 2. 2020年度（2020年4月1日～2021年3月31日）会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金の日ほどよろしくご願ひいたします。

会費のご納入につきましては8月末日までにご願ひしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになってしまいます。ご理解の日ほどよろしくご願ひいたします。

また、一部ですが2019年度分、2018年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらでも早めのご納入をよろしくご願ひいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。

### ■年会費

一般会員：5000円 学生・その他会員：3000円

\*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

\*年会費には学会誌代が含まれています。

### ■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

\*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

\*従来の記号・番号は変わりありません。

### ■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキュー店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただきますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田（uedanota(at)kindai.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計 上田貴子）

.....

**日本オーラル・ヒストリー学会**  
**Japan Oral History Association (JOHA)**

\*\*\*\*\*

JOHAニューズレター第38号

2020年8月11日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学社会学部矢吹康夫宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

\*郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。

\*\*\*\*\*